猿新聞

編集・発行者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

油断できない シカ被害

ニホンジカ（以下シカと表記）は被害作物の対象や被害時期の予想が難しく、防除すべき対象も地面に生えている植物全てに及び、手当たり次第に何でも食べ尽くしてしまいます。

これが他の動物であれば、農作物が実を付ける時期や収穫期に狙われることがほとんどであるため、被害に遭いそうな時期をある程度予想でき、防除も可能になります。

ところが、シカは特定の季節も時期なく被害を引き起こしますので、農作物の作付け時から収穫が終わるまで、常時ネットなどで覆う必要があります。

ネットで覆うにしてもシカはジャンプ力が強く、1.5㍍もの高さを飛び越える能力があるため、1.5㍍以上の高さのネットですっぽり覆ってしまわなければ防ぐことはできません。

高齢化が進む中山間地域では、ネット作りも容易なことではなく、集落ぐるみで取組む大仕事になります。

高齢化や後継者がいない現状では、農家にはシカ被害をくい止める力は残っていません。

シカは、林業にも深刻なダメージを与えていますが、現在の林業の疲弊は目を覆いたくなるほどで、シカ対策は夢のまた夢の現状です。

だが、このまま放置していると、自然の生態系が壊れてしまいます。

生態系が壊れることが、どれだけの災害につながるのか、想像してみたことがありますか？

農作物被害の比ではありません。国土の荒廃に繋がる話です。

植物や樹木が食害で枯れて表土が露出し、地滑りなどの災害につながりかねない状態のところもあり、国立公園でも絶滅危惧種の植物が食べ尽くされて植生が変わったケースもあり、シカによる被害が深刻化しています。早急な対策が望まれます。

シカは、ここ20年間で9倍になり、現在推定261万頭。10年後には、500万頭に達するといわれています。

名張地方でも、確かにシカは増え被害が深刻化しています。

集落を囲む緩衝帯と防護柵（宇陀市竜口区）

整備された緩衝帯と防護柵（名張市矢川）

シカ被害を「元から断ち切る」手だてはないものでしょうか？。

増えすぎた害獣は駆除すべきで、奈良県が「公園外」に住み着いたシカの駆除を検討しているという話もあります。

明治時代、シカを絶滅に近い状態にまで追い込んでしまったことがあります。

その後、捕獲を制限する政策が功を奏しましたが、今度はシカの数が激増し農林業被害が増加してしまいました。このような両極端な状況を繰り返さないためにも、過密状態にならない範囲での個体数管理は必要で、これは野生動物保護にも繋がる重要なことです。

個体数管理は、これまで狩猟者が担ってきましたが、狩猟者の減少でこれも思うように進まないのが現状です。

今後は、行政が捕獲を担う人材を育成するとともに、捕獲に関する法的整備などといった課題に取り組んでいく必要があります。

ニホンザルの社会構造

ニホンザル（以下サルと表記）は通常、数頭のオスと、その2～3倍のメスと、その子供たちが群れをつくって生活しています。群れの中心になるのがメスで、母系の血縁でつながる母娘の関係を中心にして、姉と妹、おばと姪、祖母と孫娘などの個体が血縁集団を作り一生涯続きます。

この血縁集団が複数集まったものを群れと呼んでいます。野生の群では、特定の「ボス」がいて他のサルを従えると言った社会構造ではありません。

年寄りのオトナメスが群れの中心となり、お互いが頼りあえる仲間意識の上で成り立っています。

オスは、他の群れから這入り込んだ一時的な滞在者で、数年のうちにまた群れを出て群れを渡り歩きます。

群れで産まれたオスは性的に成熟すると群れから出ていき、その時点で母親との関係は絶たれ、ハナレザルとなります。

なぜ群れから離れるのかは「ハッキリ」したことは分かっていませんが、自分の娘と交尾することを結果的に避けられています。近親相姦を本能的に避けているというのが通説となっています。

三重県 ワースト1 サル被害

モンキードッグ活用で汚名返上

サルによる農作物被害は、三重県で年間被害額1億2400万円（H24）に上り全国トップ。

原因は、南北に山々が連なって農地とサルの生息地の接する面が長いからだと推測されます。

群れの個体数がB群のように多くなると、群れの中で複数の小グループができ、そのグループがばらばらに行動するので群れ全体の移動状況を把握するのが困難になる場合があります。また、サルは学習能力・運動能力が非常に高く、跳躍力は垂直方向2㍍、水平方向5㍍といわれています。何よりも手がつかえて足も人の手以上の働きをします。

被害額では、一番はイノシシ、二番はシカその次がサルですが、防除対策ではサルが一番難しいといわれています。

そんな中で、サル撃退の救世主として誕生したのがモンキードッグ（以下MDと表記）です。

広域認定犬認定式風景

県境を接する名張・宇陀両市では、平成23年導入以来28頭のMDを育成、認定しています。

因みに、県境をまたいで活躍しているMDは、全国で始めての試みだといわれています。

MD1頭が守れる範囲には限界があり、効果は地域によりバラツキがある等々課題が残されていますが、一部地域ではこ2～3年群れの出没が皆無という報告もあり、順調に効果を発揮しています。

MD倶楽部では、多頭数の追い払い訓練などを実施し、面的な追い払い方法を模索しております。

MDは万能ではありませんが、防除対策の一つのツールとして、複合的に活用すれば良い結果が得られると思います。

人慣れしたサル達には、人による追い払いは効果がなく「飯の上の蠅を追う」ようなものです。

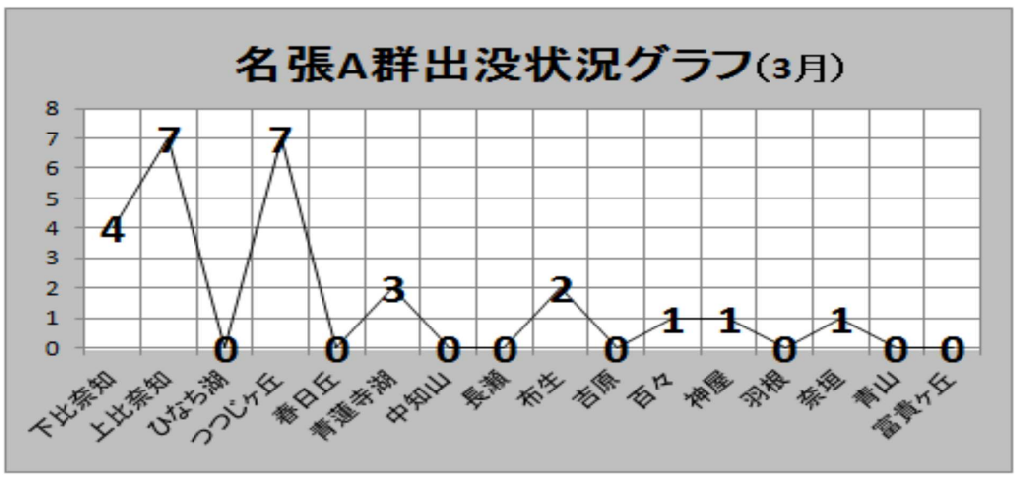
MDによる追い払いは、リードを解除して行いますので、犬猿の仲むき出しの野生の戦いになり、犬の恐怖を体験したサル達は、その地域には寄りつかなくなります。

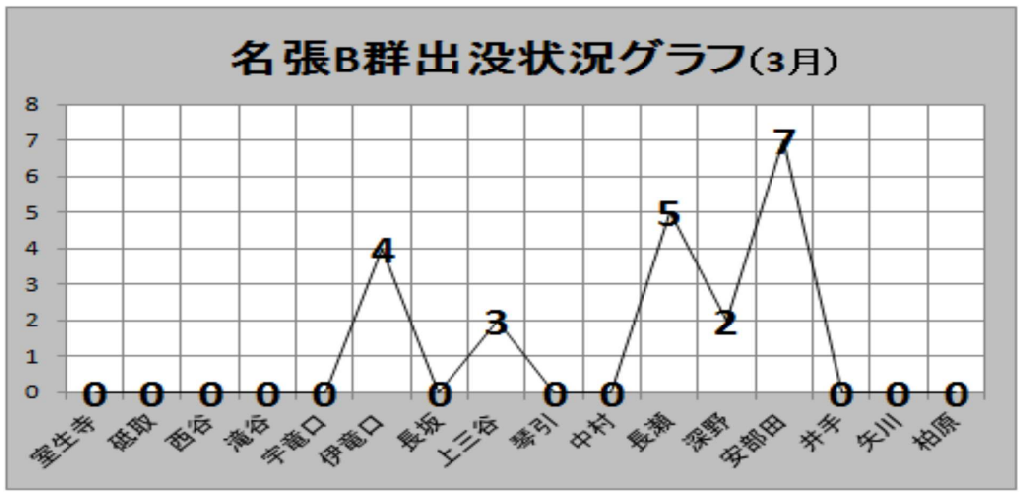
MDは公認訓練士が訓練し合格した犬です。

人に危害を及ぼすことはありません。

群れが頻繁に出没するようなことあれば、名張市農林資源室（福喜多・井上）にMDの出動要請をして下さい。

（電話 63 7625）





サルの出没状況

名張A・B群

指南員報告

3月のサルの動向

A群は、先月に続き上比奈知地区での長期滞在の傾向が続いています。

B群は、国道165号線の北側、安部田から三本松にかけての遊動を繰り返しています。両群共、家庭菜園への浸入や施錠不備に起因する農業用倉庫への浸入被害が起こっています。

★収獲作物を保管する小屋には必ず施錠をし、ガラス越しに見えるような場所には保管しないで下さい。見えたら執着し離れません。